



童話

水谷年惠

ちび助

或處にお百姓がありました。おかみさんと二人きりで、子供がありませんでした。或日二人が畑へ行つて働いてゐる時、

「子供が欲しいね。」

とお百姓が言ふと、

「一人でいゝから欲しいね。」

と、おかみさんが言ひました。するとだしぬけに「僕でもよけりやあ、子供にしておくれ。」

と大きな聲で叫んだ者がありました。二人はびつくりして、誰だらうと周りを見廻しましたが、誰

も居りません。二人は不思議に思つて、

「どうしのでせうね」

「大方狐のいたづらだらう。」

と、言つてゐると、

「僕だよ、僕此處にゐるんだよ。」

と、又聲を掛けました。二人がしやがんでよく見ると、一株の玉菜の上に小指の頭程しかない。小僧が、ちよこんとしてゐました。二人は二度びつくり、

「お前は何だ、それでも人間か。」

お百姓が尋ねると、

「人間ですとも、僕はこれでも本當の人間ですよ。」

と答へる、おかみさんが、

「何てちつぽけだらうね。」

と言ふと、

「僕だつて、役にたつこともありませんよ。ねえ僕

を子供にして下さいよ。」

と頼みました。それでおかみさんがちび助を摘み上げて掌に載せて、

「ぢあ連れて行つて、うちの子供にしませう。」

と言ふと、お百姓も、

「うんさうしよう。」

と言つて、ちび助を二人の子供にして、可愛がりました。

或晩ちび助のうちへ泥棒が這入りました、其の

晩ちび助は豆俵の上に眠つてゐました。泥棒は其

の豆俵を擔ぎ出して、外に待つてゐた馬の脊にい

はへ附けて、盗んで行きました。ちび助はうまく豆俵にしがみ附いて居ました。少し行つてから、ちび助はいきなり大きな聲で、

「泥棒、待つてつ。」

とどなりつけました。ふいをくらつて、泥棒は誰かに見附けられたと早合點して、馬をほうつて一散に逃げて行つてしまひました。ちび助は

「あつは、は、は、は。」

と笑つて、馬の脊の豆俵につかまつたまゝで、

「はい、はい、どう、どう。」

と上手に、馬に掛聲を掛けました。馬はくるりと

向きを替へると、ばか／＼／＼とちび助の家

の方へ歩き出しました。

馬がちび助の家の前で來ると、ちび助は大きな聲で呼びました。

「お父さん、お母さん、馬に乗つて歸つたよ。」

何も知らずに寝てゐたお父さんやお母さんは、

驚いて起き出して、兩戸を開けて見ました。表には豆俵をつけた馬が一匹立つてゐます。

「ちびやどうしたんだ。」

「何處の馬だえ、豆俵なんかのせて。」

「お父さん、お母さん、此の豆俵はうちのですよ。」

さつき泥棒に盗まれたんだが、僕がとりもどしたのです。」

「さう言へば其處に在つた豆俵がないね。」

「馬はどうしたのだ。」

「馬か、馬は泥棒のだが、ほうつて逃げて行つてしまつた。」

お父さん、お母さんはちび助が手柄をした事を大層褒めました。馬は泥棒に返しやうがないのでうちに飼つておきました。おとなしい馬で、豆助の言ふ事をよく聞き分けました。豆助が馬の耳の穴へ這入つて、色々言葉を掛けると、お使にも行くし、田圃へも出掛けず。馬が働くのでお百姓

もおかみさんも大層助かります。

或時、ちび助が、いつものやうに馬の耳の穴に這つて、田の中で馬を働かせてゐました。すると其近くを一人の旅人が通りかゝりました。其の時馬が勇ましい聲で、ひひん——と一聲いなゝきました。之を聞き附けた旅人は馬の側へ走つて来て、

「お、福か、お前はこんな所に居たのか。」

と言つて、馬の鼻を撫でてやりました。いつかの泥棒ではないかと思つて、そつと馬の耳の穴から顔を出して覗いて見ると、大層立派な旅のお方でした。旅のお方は

「はてな、福だけ田圃へ來てゐる筈はない。誰か連れて來てゐる人があるに違ひないがなあ。」と言つて、そつちこつち見廻してゐます。ちび助は、

「もし／＼僕が連れて來てゐるのです。」

いてしまひました。

「旅のお方、僕は馬の耳の穴の中に居る、小さな小僧です。此處です、此處です。」旅のお方が馬の耳の穴を見ると、小さな／＼ちび助が居るので、又々びつくりしました。

「もし旅のお方、僕をあなたの掌上の上へ載せて下さい。」

旅のお方が、ちび助を掌へ載せると、ちび助は「僕のうちへ、此の馬を連れた泥棒が這入つて豆俵を盗み出したんです。其の豆俵に僕がつかまつて居て、途中で、泥棒が此の馬をほうつて逃げて行つてしまひました。」

と話しました。旅のお方は。

「あゝさうですか、此の馬は福といふ名で私の家の大切な馬でしたが、或晩泥棒に盗み出されてしまひました。」

と言ふと、旅のお方は誰がものと言つたのかと言

ひます。ちび助は、

「それでは此の馬はあなたののですか、それならあなたにお返し申しませう。」

と言ひました。旅のお方は、

「いや／＼、此の馬はもうあなたの物です。あなたの心掛に感心しましたから、あなたに上げませう。」

と言ひましたので、ちび助は大喜びに喜びました。

たらり柿

柿の木が一番高い所に、たつた一つ眞赤な柿の實が残つて居ました。鈴なりになつて居た柿の實は、皆食べられてしまつて、最後に残つたたつた一つの柿の實は、柿の木が一番高い所に、うまさうな色をして赤々と光つて居ました。葉っぱも一枚残らず風に吹き落されてしまつて、柿の木は枝ばかり、たつた一つきり残つてゐる其の柿の實は